R・ムシルの「ヴァレリー体験」

加藤二郎

一　初恋の女性ヴァレリー

ローベルト・ムシルの日記は、現代作家の日記の特徴ともいえるが、備忘録風で断章的性格が強く、また作品制作のための準備工房といった観がある。そしてムシル自身が、「私はここで今度も日記をつける試みをするつもりはない」[1]と、新しい日記帳のはじめに記していることからも察せられるように、日記の特徴ともいうべき正確な日付を欠く場合が多いのである。しかも私がここで問題とする、ムシルの初恋体験といわれる「ヴァレリー体験」は、いずれも過去形で日記に登場する関係上、この体験の正確な日付を割り出すことは殆んど不可能な状態にある。ムシルのこれに関する記憶も正確ではなく、「私が十八と二十の間」[2]と頼りない。

では、ヴァレリー体験はムシルにとって重要な位置を占めてはいない体験かといえば、そうではない。たとえば一九〇五年（二五歳）の日記に「私は倫理的に敏感である。それはヴァレリー時代（Valerios Zeit）以来決定的なものとなった」[3]と記され、この体験がムシルにとって重大な転機になっていることが分る。また晩年に近い一九三七年（五七歳）の日記で自伝の試みがなされているが、そのなかでこうも記されている。「他人を愛したことは多くはないが、私がきわめて烈しく愛し得た例――父も死ぬのだと想像した時の苦悩（幼年時代のことだろう―筆者）――アイゼンシュタットでのホームシック（少年時代、陸軍幼年学校に入学当時のこと―筆者）

――ヴァレリー体験（das Valerieerlebnis）――マルタ」[4]

このように、ヴァレリー体験（以下V体験と略す）は、彼の生涯で他人をきわめて烈しく愛し得た四つのうちの一つに数え上げられているほどに画期的なものなのである。それゆえ、この体験とまたヴァレリーなる女性に深甚なる関心を私は寄せざるを得ないのだ。

ちなみにムシルの若い時代の女性関係にしぼって日記を読むと、日付のある日記の第一日めに、すぐさまヘルマが現われる。そして同時に、だがすでに追憶の形でヴァレリーの名が出ている。次に、はじめはイレーネ、それからベルタという名で現われるが、やがて実名としてのアリーセが登場する。ムシルの友人ドナートの妻となるべき女性であり、両人はともにムシルの幼友達だった。ヘルマとアリーセについては、その後も彼女らとの直接間接の接触によって生じた記入が時折なされ、日記のなかで様々な角度から問題にされ、心理・性格面など色々と検討され、人間模様を織りなしながら、二、三十年後にはムシルの作品のなかで特異な女性像となって登場するのである。ヘルマが短篇小説『トンカ』の女主人公となり、アリーセが長篇小説『特性のない男』のなかでクラリッセとして登場することは、すでに衆知の事実となっている。

だが、この二人の実在の女性に対するムシルの小説化への執着ぶりにくらべると、彼がきわめて烈しく愛し得たというヴァレリー体験の初恋の女性ヴァレリー嬢[5]の小説化は、一九〇三年頃[6]になされたに止まり、その後立ち消えたかに見える。むろんヴァレリーなる名前は、その後も日記のなかで一九二〇年まで時たま記号か合図のように現われる。だがいずれの場合にも、彼女の姿はいっさい描かれた試しもなく、彼女の語る言葉も聞かれた試しがない。前記の引用もその好例で、熱烈に彼が愛し得た例として、妻のマルタのことは「マルタ」と裸で記入されているのに、ヴァレリーの方は「ヴァレリー体験」と書かれていて、ヴァレリーの人間的な姿は浮ばないのである。ムシルが熱烈に愛したのは、ヴァレリーよりもむしろV体験だったことになる。むろんこの愛の体験は、ヴァレリーを抜きにしてあったはずはなく、彼女を含んだ総体的な体験を意味し、これが彼にとって画期的なものとなったにちがいないが、この場合彼女は、この体験のきっかけ、そしてその酵母的、触媒的な役割りを果し

たものと考えられる。下世話にいえば、若いムシルは青春時代に人がかかりやすい恋に恋する状態を、彼特有の天才的な白熱した情熱で、ヴァレリーを相手に体験したのだと推察される。

二 「ヴァレリー体験」と島での体験

ここまで来ると、『特性のない男』を読んだ人なら、私がV体験を、この小説の第一巻三二章「忘れられはしたが、きわめて重要なある少佐夫人との恋愛事件」と結びつけようとしているのではないかと思われるだろう。事実私は、ムシルの日記をその旧版[7](一九五五年)で読んでいた頃、重要で画期的なこのヴァレリーとの初恋体験が、ムシルの作品の重要な個所で実現されていないはずはないと思い、この章における主人公ウルリッヒの島での体験と密かに結びつけて考えていた。だがそれを結びつけ得る資料は殆んど見出せなかった。今般上下二巻からなる新版の日記[8]が出た。相変らず決定的な資料が豊富にそろったというわけではなく、やはり乏しいが、したがって実証的にこの二つを結びつけることは今だに困難であるが、類比的方法でならば結びつけ得るのではないかと判断するに至った。私はまず『特性のない男』(以下『小説』と略す)のこの島での体験をめぐる問題から出発して、これとの類比においてV体験を取扱ってゆこうと思う。

『小説』の第一巻一一三章で、ムシルの分身である主人公ウルリッヒは、二一歳の若いハンスに向ってこう言う。「ぼくは昔非常に恋したことがあるのだ。今の君とほぼ同じ年頃だったろう。あの頃のぼくは、実はおのが恋に恋した、つまりぼくの変化した状態(mein verändertes Zustand)に恋したのであって、この状態の一部をなす相手の女性を恋したわけではなかった[9]」と。この非常に恋したと言いながら、恋した相手は当の女性ではなく、自分の変化した状態だったという言廻しは、前述のきわめて烈しく愛した相手が、ヴァレリーではなくV体験だったことと、表現上類似していると思われる。そしてこのハンスとほぼ同じ年頃にしたという「大いなる恋[10]」は、明らかに『小説』の三二章の小佐夫人との恋愛事件を指すものであるから、V体験と二十歳の若きウルリッヒの島での体験は、二重写しにだぶってくるのである。

さて、「おのが恋に恋した」を、すぐさま「ぼくの変化した状態に恋した」と言い改めたところがいかにもムシル的であり、今後の問題となるところだが――このような奇妙な愛され方で愛された少佐夫人は、勝手が分らず大いに戸惑う。またそういう愛し方をした当時二十歳の青年士官であったウルリッヒの方も、おのが恋の強烈さのために、つまりおのれの変化した状態にみずから戸惑い、少佐夫人の近くにいることができぬ有様――彼は、この恋の源からできるだけ速やかに、かつ遠くへと立ち去り、とうとう鉄道の行き止まりの、とある海岸にたどりつき、そこから小舟に乗って島に行き、ここで彼の「変化した状態」に、ムシルのいう「愛の状態」(der Zustand der Liebe) に落ちこみ、無大無辺な一種の unio mystica 状態を体験するのである。つまり、ムシルに言わせれば、「世界とのすべての関係が弛緩、解体、いな逆転する」[11] 状態、正常な精神状態では、精神が鋭く働いて、主・客が弁別されてこそ認識が得られるのであるが、ここでは「思考も感覚も変革をきたして」[12]、『人類のしるしであるいかなる分離 (Scheidung) にも、人はもはや隷属しなくなる』[12] 状態を、体験するのである。「これは神秘的な愛の境地に参入した神の信仰者たちの手で記された状態とまったく同じ状態であった」[13]と、作者ムシルは記している。だがこの夢にも似て夢ではない状態にいた若い騎兵中尉は、当時こういう神秘家たちのことは何一つ知らず、ただこうして「世界の心臓部へ落ちこんでいた」[14]のである。

以上が、「ぼくの変化した状態に恋した」という島での状態体験の要約だが、ここでこの体験の内容というよりも形式上の特徴を二つ付け加えておく必要がある。その一つは、おのが恋に恋して相手の女性を恋したわけではなかったからであろう、まず少佐夫人には名前が与えられていないこと、そしてまた三二歳のウルリッヒが、この夫人を思い出そうとしても、その容姿などはおよそ思い出せず、思い出すのはもっぱら彼の島での神秘的体験に陥っている若き彼の姿ばかりだということだ。もう一つの特徴は、島で自然と合一した高揚した境地にいながら、少佐夫人にあてて何通も手紙を書くのだが、どれも投函しなかったということだ。そして投函された唯一の手紙といえば最後のもので、それには彼が島で体験した魂に満ち溢れた状態から得た倫理が書かれており、こ

の内容は明らかに尋常の恋文ではないということだ――「偉大な『愛に生きる』ということは、所有とか『おのれのものになれ』とかいう願望とはもともと無縁なもので、こういうものは、節約と横領と大食の領域から生れてくるものなのです[15]」

三　島での体験の再体験

若いウルリッヒは、予期もせず無自覚に、この万物斉同の愛の境地に没入した。むろんこの状態にあって、一人悦に入っているのではない。当人は驚嘆の念をいだきつつ、しごく真面目にこの自然との合一状態を体験しているのである。右の手紙も、彼の「変化した状態」内での変革をきたした思考・感情から流露した思想を、真面目に卒直に書きつけているに違いないが、これでは若者の一人よがりと取られても止むをえない、どこかお道化た書面になっている。そしてウルリッヒも、その後この時の若い自分を批判して、「ぼくは恋した人から数千キロも逃げのびた。そして――犬が月に吠えるみたいに、ぼくはその人に向って吠えたのだ[16]！」と、月に吠える孤犬に自分をたとえている。月下のピエロとたとえてもよかったであろう。やはりお道化てみせているのである。むろん体験自体を揶揄しているのではない。根元的な体験を無自覚に受け入れて、ただ月に吠える犬のようにその場で吠えて終らせてしまったことへの揶揄である。

ムシルは、この「忘れられはしたが、きわめて重要な」愛の状態へ、『小説』の第二巻『千年王国へ』で、今度は自覚的に主人公のウルリッヒをして、彼の「見知らぬ妹[17]」アガーテとともに参入させようとする。二十歳のウルリッヒは、この体験を一過性の恋の病として終らせ、彼個人の特殊な体験としていた。(だがこの少佐夫人との愛の体験は、彼にとってはやはり画期的なものとなっていたのであり、その後の女性関係を常に狂わせ[18]、彼の恋人たちを彼の「気まぐれの戯画[19]」にしてしまう力があったのである)三二歳のウルリッヒは、この体験を特殊な個人に訪れる特殊なものとはせず、正常な精神状態とは別だが誰にでも訪れる状態の体験だとする。そしてこれは歴史的にも跡づけることができ、「あらゆる歴史上の民族の宗教、神秘、倫理のなかで繰返され[20]」、「あらゆる宗教よりもより根源的で、しかも人間にその能力のあるきわめて重要な状態[21]」とみなすが、「不思議と未発達

のままである根源的体験の状態」[20]でもあると確認するのである。そしてこの未発達、未発育な状態を、ウルリッヒは『千年王国へ』で発育、発達させる努力をするわけである。

だが、この根元的体験の状態を、エッセイならばともかく小説化し、この目に見えず、言葉も絶えた状態を視覚化し、あいまいな神秘主義的な言語を排して、いわば現代的に言語化することは至難の業である。まず主人公のウルリッヒが数学者で鋭利で厳密な精神の持ち主であり、なまなかの妥協を許さぬ男だからである。彼はムシルと同様に、この「愛の状態」を濫用し下落させる感情過多の文学や芸術、またこれを水で薄めた安手の神秘主義には手厳しい批判を『小説』のなかで行ってきたし、またこのような魂の状態を問題とせず、専ら事実ばかりを積みあげて、おのれの業績を傲慢にも信じこみ、それを進歩と信じこんでいる「ガリガリ合理主義」[22]者を槍玉にあげてきたのである。このような世間一般の風潮に抗して、ウルリッヒ自身に真正な愛の根元体験をさせ、しかもこの状態を顕在化してゆくためには――納得のゆく唯一の根元体験に至らんがために神仏を取るに足らぬものとして足蹴にした仏僧のような――瀆神的でラディカルで、しかも懐疑精神の旺盛な態度で、ウルリッヒをしてこれに向わせる必要があるだろう。

ムシルは、長いこと会わずに過し、今は人妻となっている忘れてしまった妹のアガーテとウルリッヒを会わせる。そしてそこに双生児のように余りにも自分とよく似た女性を発見させ、この妹と意気投合させ、近親相姦の禁を犯すか犯さぬかの愛の緊張下に彼らを置くのである。ウルリッヒはこの状況下で、昔の島での静かなうちにも高揚しきった愛の状態を想起し、古来の信仰家たちが書き記した神との合一の神秘体験を読み、そのことについて妹と話し合うのだ。「彼らが話している高揚状態では、思考とモラルとの間に不思議な類似がある。それはあまりに似ているので、どの思想も幸福として、大きな印象的な体験として、贈物として感じられるほどだ。また、どの思想も貯蔵室の方へは移行せず、また獲得するとか、圧伏するとか、固執するとか、観察するとかいう感情とも、思想は結びつかず、そのため自己所有の楽しみが、頭のなかでも胸のなかでも、果てしもなく自己を他に与えながら他と抱き合うということによって置き換えられ

るのだ[23]」

この文章から察せられるように、今ウルリッヒがアガーテと志しているものは、真理の遂究と呼ぶものではなく、真理のなかに生きることと違うだろうか。「存在の真理のなかでの脱自的な内在」(das ekstatische Innesstehen in der Wahrheit des Seins) というハイデガーの煮つめた言葉がそっくり当てはまる気がする。兄妹はこの状態を予感しつつ、やがて愛の『千年王国へ』と入ってゆく。ウルリッヒは、信仰者としてではなく、「自動車でも聖なる道を行くことができる[24]」ように、一歩一歩このやわな道を踏み固めていこうとする。したがってこの道は、牛歩で進められ、厳密な精神でさまざまな方面から慎重に検討されては停滞し、読者はアガーテとともに、ウルリッヒのこの厳密な検証に耐えがたい思いをすら懐くのである。だがこの厳密な検証によって四方を固められてはじめて、この目には見えず言葉の絶えた別の状態、第二の世界が逆に顕在化してくるのである。

四 「別の状態」と「ヴァレリー」

ウルリッヒは、二十歳で体験した彼の「変化した状態」を三二歳になって再体験すべく、これを神秘家たちの記した「千年の書[25]」を調べて、その裏打ちをするのだが、この状態を「別の状態[26]」(der andere Zustand) と名づけて、ムシルが本腰を入れて研究しだすのは一九二〇、二一年を中心とし、そしてそれ以降のことである[27]。一方この二〇、二一年の時期は、『特性のない男』の三段階前の小説構想といわれている『スパイ』(Der Spion) が次段階の『救済者』(Der Erlöser) へ移行し始める時期でもあり、その内容も次第に『特性のない男』に近づきつつあることが、日記の多くの断章から読み取れる時期でもある。そしてこの時期は、私が問題としている「ヴァレリー」が日記から立ち消える私にとっても重要な時期でもあるのだ。

「ヴァレリー」なる語は、一九二〇年に一度出るだけで、その後はぱったり出てこなくなる。もっともそれ以後に一度だけ姿を現わすが、それははじめに引用したあの自伝のための記入(三八ページ参照)である。しかしこれは、『特性のない男』が世に出た一九三〇、三三年より後の三七年の記入である。それゆえ「ヴァレリー体験」と島での体験の類似性を問題とする場合には、除外

しても差支えないものである。ではなぜヴァレリーは、二〇年を期に姿を消したのだろうか。それは無用になったからムシルの記憶から失せたのではない。その逆で、このムシル個人の重要な初恋体験は、歴史的にも跡づけることのできる普遍的な内容をもつ「別の状態」という語のなかに、この時期に発展的に吸収されていったのだというのが私の解釈である。

ムシルは、前述のように、彼の『小説』の第二巻で、「別の状態」を大きく取りあげているのだが、彼自身がこの状態を体験した事実についての記述は、残念ながらまことに乏しい。あるとしても、その一つは、「私が幼年時代に心にいだいた（弱い）宗教的発作は、十歳ないし十一歳に当り、そしてそれ以前もそれ以後もなく……までは……？」[28]という謎めいた記述である。この「……までは……」の意味を、私としてはV体験までは と考えたいが、何の裏づけもない。もう一つは、「そもそも一つの改宗であり、そして生涯私を導いた青春時代の体験から出発」というのがある。これは、『特性のない男』の英訳者カイザー夫妻がその昔ローマにあったムシルの遺稿中から発見して、彼らの著書『R・ムシル、作品入門』（一九六二年）の最後に[29]一早く掲げた未発表の遺稿だが、なぜか分らぬが、フリゼー編集の新版の日記には見当らぬものである。だがこれが贋文書でないことは、この一葉の原稿がそのままの写しで載っていることからも明らかである。しかし、この改宗でもあり、その後の彼を生涯導いたという青春時代の体験も、これをヴァレリー体験と結びつけたくても、それをつなぐ資料は残念ながらないのである。なお、一九二一―二三年？の日記のなかで[30]、ムシルが「別の状態」に対する彼の「基本的態度」として、「別の状態を社会生活の支柱にすることは問題にならない[31]」と記しているのは、彼の厳密な精神の証しとして重視すべき発言だが、さりとてこの状態は個人的に重要ではないと言っているのではなく、またこれに続く「この状態ははかなすぎる。私自身今日ではもうつぶさに思い出せない」という記述も、この状態を彼が体験しなかったと言っているのではむろんないのである。

五　初恋体験の時期

ヴァレリーの問題に移る。「ヴァレリー」が一九二〇

年までに日記に出てくる時期を大別すると、(1)一九〇二―〇三年？ (2)一九〇五年 (3)一九〇八年 (4)一九二〇年で、このうち(1)、(2)の時期が集中的に多く、(4)は一度だけである。

(3)の時期のものは、のちの戯曲『夢想家たち』（一九二一年）のための最初の草案（ムシル未亡人による推定）[32]に登場する女性の名前である。しかしここに登場する「ヴァレリー」は、その後『小説』のなかに登場する慕男狂（Nymphomanie）の「ボーナデァ」を連想させる性格の女性であり、彼女は主人公のウルリッヒにまといつく美しい上品な人妻であるが、ウルリッヒが「ぼくの気まぐれの戯画だった」[19]と述懐するような彼の愛人の一人であり、したがってムシルが「きわめて烈しく愛し得た」「V体験」のヴァレリー嬢とは、何としても結びがたい。それゆえこの時期の「ヴァレリー」は、ムシルが一時期仮に借用した作中人物名とみなすのが適当であろうと思うし、初恋のヴァレリーその人をここに登場させたものではないと私は判定し、この時期のものは相手にしないことにする。

(1)の時期のものは、V体験のなされた時期と、その体験の内容と形式を憶測するための重要な資料となる。

まずこの体験の時期から始めると、新版の日記の編者フリゼーが下巻の註解[32]でこの割出しをしているので、それに則して簡単に報告したい。はじめに記したように、この時期は何年何月と決定できない状況にある。「小説の準備作業」と題する日記（一九〇三年）のなかで――これはローベルト・ムシルの自伝的要素の濃い小説草稿だが――主人公ローベルトと彼の虚構上の兄とが一人の女優と知り合う。そして彼が兄を押しのけて彼女の愛を獲得し、「彼の感情は生れて始めて金で刺繍のされた緋色の愛のマントを着た。彼の性質全体が一変した」[33]そしてこの時期は、ローベルトが大学生活を終える前々年ということになっている。この草稿では、相手の女優の名は出てこないが、別の個所で[34]、この草案を裏返しにした試みがなされていて、今度はローベルトと彼の虚構上の弟との関係が記され、そして「ローベルトはヴァレリーと関係をもち」と書かれている。フリゼーは以上のことを事実として受け取めれば、V体験の時期は一八九九年夏から翌年の夏になると推定し、またこれは本論のはじめに記した時期（三七ページ参照）とほぼ合致するとし

て、一八九八、九九――一九〇〇、〇一年を妥当な線としている。ムシルが軍人志望をやめ、ブルュン工科大学の機械工学科に籍を置き、一方ブルュンの新進作家連中と「文学の夕べ」などを企画していた時代である。二十歳前後の秋の日々が、ヴァレリーとの初恋体験の時期と推定される。これは島で神秘的体験をした若きウルリッヒの年令とほぼ一致する。

では、女優ヴァレリーとはどんな女性であったのか。私は、これもフリゼーが紹介しているS・ムーロト(Sibylle Mulot)の調査研究を頼りにして[32]、その空しい結果を報告しておく。S・ムーロトは、ブルュン時代の若きムシルの足跡をたどり、ヴァレリーという名の女優を探り出そうとしたが、問題のこの時期にはこの名の女優はブルュンでは活躍しておらず、当時の劇場関係資料を渉猟しても、この名は見つからなかったという。だが、『可愛いい子供たち』(Die lieben Kinder)というV・レオンなる作家の民衆劇のなかに、役名としての「ヴァレリー」という名を彼女は発見した。そしてこの劇ならば、一八九八、九九年に数回にわたりブルュンで上演されて大好評だったという。ヴァレリー役を演じたのは、パウラ・ウルマン嬢で、彼女は一八九七年秋から一九〇〇年五月までブルュンで「素朴な恋人役」として芝居に出ていたが、男の子役も演じたこともあるという。ブルュン市民のアイドル的存在だったらしく、彼女は市民たちに惜しまれつつベルリンの劇場に移ったが、その後のことは杳として分らぬという。ブルュンに登場した当時の年令はほぼ二十、二二歳と推定され、したがってムシルよりも少し年上だった勘定になる。

もしこの調査通りに、ムシルがきわめて烈しく愛し得たV体験の相手役が、ヴァレリー役の女優ウルマン嬢であったとすれば、当時のウルマン嬢ことヴァレリーの姿は、無理に想像しようとすれば想像できなくもない。S・ムーロトの若きムシル研究書が手に入れば、あるいはウルマン嬢についての詳細な記述や写真の一葉ぐらいは載っているかもしれない。だが、ウルマン嬢が当時のムシルの恋人だったという証言もないようだし、またムシルがヴァレリーその人についてと全く同様に、ウルマン嬢についても一切日記のなかで語っていないのだから、ヴァレリーことウルマン嬢の姿を想像するのは今のところ無益だろう。むしろ、ムシルの初恋の相手がヴァレリ

ーであってヴァレリーでないようだということ、そしてその容姿が何一つ浮ばぬということが、逆に少佐夫人の無名性とその容姿をウルリッヒが思い出せないことと類似していると、私は言いたい。

日記のなかで、「ヴァレリー」と裸で記入されているのは、一九〇三年？　までが殆んどで、その後は「ヴァレリー時代」、「ヴァレリー伝統」、「ヴァレリー思想」そして「ヴァレリー体験」というような、ムシル個人の心覚えのための術語と化して記入される場合が多くなる。そしてこれらの術語は、ヴァレリー体験のなされた時代、その体験の伝統、その体験内での思想を意味し、ここでも、ウルリッヒにとって少佐夫人のことよりも島での体験が重要であったように、ムシルにとってはヴァレリーよりもV体験が重要であったことを、再度認識させられることになるのである。

六　「ヴァレリー体験」の内容

ヴァレリーの名が最初に現われるのは、一九〇二年二月十三日の日記である。すでに一、二年過去のものとなった、彼にとっては予期せぬ襲来だったと思われる愛の体験を、二二歳のムシルは、ここで始めて言葉にまとめようと苦心しているようだ。

「偉大な愛の人たち――キリスト、釈迦、ゲーテ――そしてヴァレリーを愛したあの秋の日々のぼくは、別の種属を形成している。この人たちは、真理を遂究せぬが、彼らのなかで何かがまとまって全体的なものになるのを感じている。それは純人間的なもの――自然の現成(Naturprocess)なのだ」[35]

「別の種属」とは、この前にカントなどについての記述があり、真理を遂究して、思想を論理的・合理的に強引に体系化する哲学者たちとは別の種属だと言うことである。キリスト、釈迦、ゲーテという風に、宗教家、思想家、詩人などを一気に並べることは、ムシルにはなんの矛盾でもなく、ニーチェもこれに加えたであろうし、もし当時の彼がその名を知っていたとすれば、孔子、老子、また神秘家のスウェーデンボルクなどの名を、ここに連らねたことだろう。一九二一年、「別の人間を発見する試み」と題する日記――これは「別の状態」の中味の発見の試みである――のなかで、ムシルはこの系列の人たちを「倫理家」(Ethiker)と呼び、道徳家、哲学者、

科学者と区別して、「彼らは詩人と似ている。彼らの倫理への寄与は形式ではなくて質料に関するものだ。彼らは斬新な倫理的体験をもつ。彼らは別の人間だ。彼らの系列には、また道徳を変える隠れた力がすべて備わっている」[36]と書き連ねている。このような愛の大先達たちの、道徳を変えるほどに強烈な「斬新な倫理的体験」と、ヴァレリーを愛した秋の日々の自分の体験を並置しているのを見ると、若いムシルにとって、この体験がいかに意味深くそして稀有で根元的なものであったかが推察できる。ムシルはのちに、「彼らのなかで何かがまとまって全体的なものになる」という個所を、「何かがまとまって繰返し一つの全体（一つの状態）になる」[37]と書き換えている。いまだに読解しにくい断章だが、ふだんは内界でも外界でも分断され、分離していたものがまとまって一つの全体となり、血が通いあい、生気潑剌とした一つの精神状態になる、と私は解したい。「繰返し」の意は、この状態では、現象が川のように流れ去らず、噴水のように常に新鮮な循環を繰返すからだろう。この秋の日々のぼくの状態の理解を助けるために、先に引用した小説（四五ページ参照）の続きを訳してみる。「彼の性質全体が一変した。思いやりのある感情が、贈与の感情が彼を襲った。広やかな思考の拡り、思考の精巧なからみあいが明らかとなった。ほんの数週間で彼はおのれを越えて実っていった。↓彼の思考と感情が整う。静謐と成熟の哲理が形成されてくる↑」[33]

これが、ヴァレリーとの恋のさなかにいた時のローベルトの内的活動の状態の叙述である。前出の「純人間的なもの」とは、このような状態を指しているのに違いない。日常の彼の感情・思考をしばっていたたがが外れて、それらがその可能性を十二分に拡げているのが分る。感性・思考が広々と拡って自・他の区別が消え、ヴァレリーはすでにローベルトのなかに入ってしまったかのように、彼女の姿はここでも一切書かれておらず、叙述はもっぱら彼の「変化した状態」に向けられている。形式上、これは島でのウルリッヒの状態描写とよく似ている。前出の「自然の現成」という言葉も、右のような自・他の境が立ち消えた状態になると、ふだんはみずからを隠蔽することを好む自然が、おのずからその姿を現わす状態を集約しているのではあるまいか。

さて、この変化した状態を裏書きするものとして、ヴ

アレリー宛ての手紙と推定されている散文詩型の手紙[38]が一つ残されている。

「なぜぼくは書かないか？
でもひっきりなしに書いているのだ君あてに！
何通も何通も。
そしてまた何通も何通も。
でも書いているのではないのだ君あてに」

訳すのが面映くなる手紙の書き出しだが、これは若い二十歳のウルリッヒが島で少佐夫人を忍びつつ何通も手紙を書きながら投函しなかった状況とよく似ている。

「そして——
ぼくは今ほど君の近くにいるのも珍しい、なぜなら今ほどぼくがぼくの近くにいたことも珍らしいのだから」

稚拙な表現とはいえ、座標系の変換した状況は捕えている。自・他の境が消えて合一した神秘的な新たな空間にぼくがいることがよく分る。そしてこのような愛の境地にいるぼくは、神の信仰者でもないのに、敬虔(fromm)な気持になっている。

「ぼくは敬虔な気持で野蛮人[39]のなかをそぞろ歩く。敬虔——なぜならぼくの魂は満ち溢れているのだから——ぼくはこの状態を敬虔と名づける——敬虔——これは地上の彼方にはない王国——されどこの地の彼方に————そして野蛮人とは、満ち溢れた魂は祈るものだということを知らぬもののこと」

一九〇二—三年の右に掲げた文章を見れば、ウルリッヒの島での体験と同じく、その文章の一語一語が、「原因や目的や肉体的欲望によって動いているものはなく[40]」、「ある内面的な活動の状態[41]」を示していることが分る。だが島での、「すべてが、ちょうど噴水が水盤に果てしなく落ちるように、次々と新しい輪になって拡ってゆく[40]」この状態を、若いムシルは、その広大無辺さをそのままに叙述する術をまだ知らない。「あの秋の日々のぼく」を記した二日後にもヴァレリーの記入がある——

「ぼくはかつてヴァレリーにあてて書いた。日々美しい思想が完全に育ちゆくのを感ずるだけで十分だ——明るく、しかも芸術の感性的秘密に取り囲まれて、と[42]」（一九〇二年二月二二日）これも島の体験でウルリッヒが「彼は明るく、そして至るところ明るい思想で満ち溢れていた[40]」の先駆をなす表現であり、同じ状態の記述であるが、まだ豊かなものとなっていない。そして若いムシ

ルは、彼にとって重要なこの「満ち溢れた魂」の状態を、日記の上ではその後一時忘れてしまったかに見える。

七　E・ケイの「魂」論との出会い

一九〇五年六月十九日、『デイ・ノイエ・ルントシャウ』誌六月号所載のエレン・ケイの評論『生活術による魂の開発』(Die Entfaltung der Seele durch Lebenskunst) を読む。「私は夜コーヒー店でE・ケイの評論を読み、ひどく感動した――私自身の過去の声を聞く思い。昔の私の思考様式がここにある、ヴァレリー伝統 (die Valerie-Tradition) !」

この感動は事実深く、まるで魂に目覚めたかのように、ムシルはその後何日もかけてこの評論の抜粋に没頭するのである。これほど多量の抜粋を彼がした例はまことに少ない。異常なほどである。彼をこのように仕向けたのは、V体験でのあの「満ち溢れた魂」の状態の言語化で、以前は彼がよくなし得なかったことが、ここで展開されているためだと思われる。この抜粋を読むと、先に引用したV体験に関する若いムシルの言葉が裏づけられている個所がいくつもある。と同時に、のちの「別の状態」へ取り入れられる言葉も数多く発見できる。ムシルは抜粋しながら、V体験を客観的に確認し、そして当時言葉になり得なかったものを、この評論から抜き出しながら定着しようとしているように思われる。だがこの感動も、彼の鋭い理性批判にあって、やがて醒めるのだ。「七月二一日、彼女の論説は私に深甚なる影響を及ぼしたが、今ある種の酔醒が訪れた。もっと魂を、すべからく魂を――という彼女の根本理念は卓抜だ。魂を研究対照にする彼女の着想は、私にとって救いであった」[44] このようにE・ケイの「魂」論に感嘆し感謝しながらも、彼女の反理性的な論評の態度に彼は批判を加えるのである。

二十世紀に入ってから、十九世紀の理性崇拝に対する反動が、奔流のように沸き出してくる。「時代は魂自体を体験したがっている。原体験を欲している。したがって時代はあらゆる前提を拒否しながらも、同時に既存の宗教や科学を目的のための手段として利用している」[45] (C・G・ユング)　ムシルもこの流れのただ中にいるが、彼の立場は――理性がありすぎて魂が少なすぎるのではない。魂の問題についてあまりにも理性の思いやりがなさすぎたのだ。理性が魂の問題に真剣に取組み、こ

れを律してやり、それ本来の倫理的な根元的な力を十全に発揮できるようにすることが大切なのだ――ということになろう。

こうしてムシルは、その後自分が作成したこの抜粋のそこここに、批判の追記[46]を心覚えのためのように簡単に付け加えるのである。特にこの抜粋の一部を、『小説』の「ディオティーマ」に言わせて、そのパロディ化を計画しているところが興味を引く。問題のヴァレリーと抜粋との関連づけをした個所もむろんある。そのうちの二個所は、「V体験」と追記されている。

「ほとんどすべての人は、その生涯の五月の時期に、生気潑剌たる生が白く花咲く約束のように、一度は佇むことがあるものだ。こういう人は、その後全世界を得たかもしれないし、また失ったかもしれない。だがいずれにせよ決断は彼らの魂のそとで下されたのだ。↓V体験[47]↑」

「人間は愛し悩みそして祈る時にこそ人間なのだ。魂の満ち溢れた人は、その愛の衰微を恥じる。なぜならその廃墟はたいてい、自分の仕事と自分の本性が脇道に外れてしまったこと、そしてそれらが最も深い意味で真正なものではなかったことを意味するのだから。↓V体験[48]↑」

この二つの抜粋は、二、三年前のV体験の記述を思い出させるし、その裏づけとなるものと思うが、ここで別の要素が加わっている。つまり、「満ち溢れた魂」の状態、「全体的な状態」、また「自然の現成」状態から抜けてしまった状態が、ここで問題となっているのである。もはや自己が魂と一致せず、以前の状態を思うと、索漠たらざるをえぬ正常状態への帰還、意味ある生から無意味と感ぜられる生への帰還である。すでに一九〇二年三月十二日の日記に、こういう記入がある――「この死んだ感情は――たとえばこれはあの当時ヴァレリーとのあの速やかな絶断に私を導いたものだが――悪い[49]」

この悪いという倫理評価は唐突と思われるかもしれないが、ムシルにとっては、高揚した愛の状態における実った思考・感情は生きていて善いのであり、その状態から脱落した状態での思考・感情は死んでいて悪いのである[50]。人間のもつ能力の可能性が開花した状態が善なのである。E・ケイの評論は、この点でムシルの倫理指向と一致している。前出（四八ページ参照）の自伝的小説草

案の続きを読むと、若いローベルトのこの倫理的指向が明らかとなる。「……静謐と成熟の哲理が形成されてくる↑　それから酔醒が訪れた。無造作に、そっけなく、必然的に。彼らは互いに実りを終えたのだ。『時々刻々が魂を実らせなくなった今、これ以上一緒にいるのは倫理的でない』と彼は言って、別れを告げた」[33]この草案はあと半ページほどで終るが、これが事実上のヴァレリーとの恋の終りである。

八　「ヴァレリー体験」の再体験

恋はいずれは終るものだ。しかし若いムシルは、晩年になっても「きわめて烈しく愛し得た」と記すことになるこの「ヴァレリー体験」を、彼にとって善なるこの体験の味を、その後忘れ得なかったのである。一九〇三年秋、彼はベルリン大学に通うためこの大都市に移るが、それ以後に『ヒッポリーテ日記』[51]という自伝風の小説を計画している。そしてここで小説の主人公は、V体験を再度体験しようと試みるのである。主人公のぼくには、すでにマルゲリーテという、ヘルマ（短篇『トンカ』のモデル）を思わせる女性がいる。だがぼくは、この女性にあきたりぬと見え、マドレーヌという娘と知り合いになる。この『日記』は、主人公が上流の娘らしいマドレーヌに気がありながら、しかし下層出の娘らしいマルゲリーテも棄て切れず、この二人の女性と自分の感情の日毎の変化を、日記風に追うことが主眼となっているようである。『日記』は、他の多くの草案と同様中断しているが、マルゲリーテと主人公を結ぶ目には見えない糸は意外に強く、彼とマドレーヌの関係は、ぎくしゃくしてしかも平板に終ることが予測される。

さて、ヴァレリーとの関係に目を向ければ、「ある晩ぼくがマドレーヌの家でリルケの詩を朗読しているうちに、決定的な転向（Wendung）が訪れたようなのだ。そして同時にぼくは、せんだっての晩、彼女の家からの帰り道で、ヴァレリーをふと思い出したことを思い出した」「ある決定的な転向」とは、もちろん正常状態から「別の状態」への陥没を意味しよう。事実リルケの詩は、「別の状態」内で花咲く詩だ。[52]この状態へ誘い込む魔力をもっている。そしてこの状態に入ると同時に、主人公にヴァレリーを思い出させたのは、若い筆者のムシルなら当然のことだろう。「別の状態」とヴァレリーとは彼

にとって分ち得ぬものなのだから。主人公は「（誤って）マドレーヌとヴァレリーのタイプが似ていると当て推量をして」、「早速ヴァレリー時代（die Epoche Valerie）を再び生きたいという願望をいだく。当時はかなり予測せぬ（ziemlich ahnungslos）状態で襲ったものを、今度はあらゆる経験を武器にして」と。

だが、どうであろうか――昔の恋人を思い出して、実り切って落ちたものを、別の女性と早速にもう一度体験しようとするこの意図には、腐肉を嗅ぐようなうさんくささがありはしまいか。主人公自身もそれを認めて、これには「病的な刺戟」があると言っている。だがそれにもかかわらず、彼は愚かにもそれを実行に移すのだ。まるで詐欺師のように、宗教的雰囲気を醸し出すためだろう、彼は高い椅子に位置して、司祭のような（priesterhaft）荘重な声を出して、リルケの美しい詩を頌読（psalmodieren）するのである。そしてこうして彼は、実際に彼らの個人的な関係をそれで極度に高めることに成功し、「そしてこの霊的な交わりは、あたかも二人が一夜を共に眠ったかのようであった」と抜け抜けと記している。

これでは、「ヴァレリー体験」の濫用と言わざるをえまい。若いムシルの Jugenddummheit の一つではなかろうか。ここには、『特性のない男』の第二巻で、三二歳になったウルリッヒが、二十歳の時にした島での体験を再び生きようとする際の、本稿の三で述べたような厳密な自己検証が欠けている。したがって、「別の状態」の叙述に見られる、理性的な澄んだ明るさ（klar）が欠けている。

だが、内容面はともかく、形式面から『ヒッポリーテ日記』と『特性のない男』を比較すると、実によく似たところがある。『日記』では、ムシルの分身と思われる主人公のぼくは、ヴァレリーとの体験を、当時は「かなり予測せぬ状態で襲われた」が、今度は「あらゆる経験を武器にして」、マドレーヌと共に再体験しようとして、リルケの詩を用いてこれを実行に移す。一方『小説』の方では、ムシルの分身である主人公のウルリッヒは、島で無自覚に体験したものを、妹のアガーテと共に今度は自覚して再体験しようとして、「千年の書」を用いてこれを実行に移す。

この両系列の形式上の酷似性に、「ヴァレリー体験」

（本稿の六参照）と「島での体験」（本稿の二参照）の同質性を加え、さらに当時の若きムシルと若きウルリッヒの年令がほぼ一致すること、共に手紙を何通も書いて出さなかったこと、そして両者それぞれの体験にくらべれば恋の相手のヴァレリーも少佐夫人も影がきわめて薄いということ（本稿二、五、六参照）などを加えれば、ムシルがこの若き日のヴァレリー体験を『ヒッポリーテ日記』を経由して、その後さまざまな文学的経験と研究を積んだ挙句に、これをまず若きウルリッヒの島での体験で実現させ、それをやがて『千年王国へ』で大々的に開花させたのだという私の空想は、必ずしも盲想のそしりは受けないであろう。

最後に申し添えておけば――『ヒッポリーテ日記』のなかで、主人公のぼくはやがて、「ヴァレリー時代（Valeriezeit）の継承であるかのように」マドレーヌあてに長い手紙を書く。それも長椅子に横たわり、どういうわけか分らぬが旅行毛布（Reisedecke）にくるまって眠ったあとで。

三題噺めいて恐縮だが――この旅行という言葉と、長い手紙と、ヴァレリー時代の継承という三つの言葉がここで交錯するのを見ると、その後二十何年後かに、汽車の旅の末に島につき、そこで少佐夫人を忍びつつ手紙を書くこととなるムシルの分身ウルリッヒの姿が、やはりヴァレリー時代の継承をしているよう思われてくるのである。

ここで引用した『特性のない男』は、Robert Musil: Der Mann ohne Eigenschaften, herausgegeben von Adolf Frisé, Rowohlt Verlag の一九七〇年版を使用した、MoE と略す。

旧版の日記は TB, 新版の日記は上巻を I, 下巻を II と略す。数字はページ数を示す。

（1）I, 265

（2）I, 773

（3）I, 153

（4）I, 912

（5）ヴァレリー嬢→II, 816 に、「彼がまだヴァレリー嬢を愛していたとき」とある。

（6）一九〇三年頃→一つは、自伝風の小説草稿で、ムシル未亡人マルタによれば一九〇三年と推定されている。もう一つは、やはり自伝風の『ヒッポリーテ日記』で、フリゼーは一九〇三年秋以降、あるいは〇六年以降とも推定して

いる。

(7) 日記の旧版→Robert Musil: Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden, herausgegeben von Adolf Frisé, Rowohlt Verlag, 1955.

(8) 日記の新版→Robert Musil: Tagebücher, herausgegeben von Adolf Frisé, Rowohlt, Dezember 1976. この版については、本学の『言語文化』十一号でそのあらましを予告したが、訂正すべき点もあるので改めて紹介する。上下二巻よりなり、上巻は日記そのものが集録されていて約一〇〇〇ページ。それゆえ旧版の二倍以上の分量となっている。ムシルが記入して後に消した個所も復元されて〈 〉印のなかに入れられており、また彼が後から書き加えた個所は、↓ ↑印のなかに収めてある。したがって新版の日記は、遺稿中の日記の部分を、ほぼ原形のまま集録したものと言うことができる。もっともムシルの日記の原稿は、すべて完全に残っているわけではなく、一部は戦災で失われ、一部は紛失して目下見つからぬものもあるようだ。下巻は、上巻の随所に入れられた註番号に即応する「註解」の部分が約八〇〇ページ。親切な「註解」が多く、フリゼーはここでムシルの伝記を手掛ける努力もしている。さらに、日記と註解を裏打し補足するための資料が集められている「付録」の部分が約五〇〇ページ。ここには、日記の異文、大部分はまだ未発表の小説草案、ムシルの手紙とその草稿類、その他に医師、軍隊の証書など、多数収められている。そして最後に、いろいろな分類方法で整理された、まことに便利な「索引」の部分が約一四〇ページ続き、全体で一四〇〇ページ以上の大部のものとなっている。因みに、この便利な「索引」で「ヴァレリー」を引いてみると、「人名」欄にはなく、「作中人物」欄に入っている。本稿の五で報告しているように、バウラ・ウルマンがヴァレリーの実名であり、ヴァレリーは虚構上の名と決めて、こういう処置を取ったのであろうが、この処置が正しいかどうか疑問である。因みに、「ヘルマ」と「アリーセ」について調べると、「人名」欄と「作中人物」欄の両方に入れられている。

(9) MoE, 550

(10) MoE, 123

(11) MoE, 558

(12) MoE, 558

(13) MoE, 125 これは、老子学派の言葉であることが立証されている。

(14) MoE, 125

(15) MoE, 126

(16) MoE, 764

(17) MoE, 674

(18) MoE, 283-4 参照

(19) MoE, 899

(20) TB, 673

(21) MoE, 766

(22) TB, 666 "Dörrfischrationalität"

(23) MoE, 765

(24) MoE, 751

(25) 「千年の書」→MoE, 1178 "das tausendjährige Buch" ムシルが「千年の書」と神秘的な名で呼んでいるものは、二千年以上にもわたる東西の宗教家、思想家たちの神秘的合一の体験の語録を集めたマルチン・ブーバーの「法悦の告白集」"Ekstatische Konfessionen" (1898) であることを発見したのは、今は亡きムシル研究者のW・バウジンガーである。M・L・ロートは、この註の (27) に掲げてある彼女のムシル研究書で、この事実を認めながらも、このブーバーは、ムシルが一九二〇年に読んでいるK・ギルゲンゾーンの「宗教体験の心的構成」"Der seelische Aufbau des religiösen Erlebnisses" から孫引きしたものであるとしている。

(26) 「別の状態」については、一橋論叢第六十四巻第六号の拙稿「オーストリアとローベルト・ムシル」を参考にされたい。

(27) 「別の状態」にムシルが取り組む時期が、一九二〇、二一年を中心にしていることについては、次の三つのムシル研究書もそれに触れている。

R. v. Heidebrand: Die Reflexionen Ulrichs in R. Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften", Aschendorff, 1966 の九五ページ。

Marie-Louise Roth: R. Musil, Ethik und Ästhetik, Paul List Verlag, 1972 の九六ページ。

Dietmann Goltschnigg: Mystische Tradition im Roman R. Musils, Lothar Stiehm Verlag, 1974 の五五—六ページ。

(28) I, 882

(29) Kaiser/Wilkins: R. Musil. Eine Einführung in das Werk, Kohlhammer, 1962 の九八—九ページ。なお、未発表のこの遺稿を、M・L・ロートは彼女の研究書 (註 (27)) の二三九ページで使用している。

(30) I, 660

(31) 社会生活の支柱→この引用はいささか唐突なので、ムシルの考えを私なりに註釈したい。本稿の四一ページのウルリッヒの手紙の内容、四二ページのウルリッヒの妹との話の内容からも推察できるように、別の状態を体験しつつ、これから流露してくる思想は、ムシルによれば、資本主義的精神や合理主義的精神とは全く対立する愛の精神の発露であるから、この状態の倫理はまことに社会生活の支柱にしたいようなものである。だがこの状態は、正常状態とは異なり、長続きのしないことは認めざるを得ない。したがって社会生活の支柱にはできぬと、ムシルらしい理性判断を下しているのである。

(32) II, 13 の註五三

(33) I, 48
(34) I, 86
(35) I, 12
(36) I, 645
(37) II, 849
(38) II, 815 II, 9 の註四四および II, 13 の註五三によれば、この手紙をヴァレリー宛てのものとし、時期を一九〇一年と推定したのはカイザー夫妻である。フリゼーもこの推定をほぼ肯定しているようだ。私はこの推定の是非を問うことはできないが、II, 560 の註五五八aで、ムシルが日記に記入している Gedichten, die aus schweren u. sehnsüchtigen Gemüt gekommen sind, の詩の一つに、この散文詩型の手紙をいれているのは納得できない。私には、この手紙はそのような Gemüt の発露とは思われないし、むしろ明るくて天真爛漫な気持の流露と思われる。
(39) 野蛮人→『特性のない男』でこの言葉は二、三度使われているが、重要なのは MoE, 769 で、ウルリッヒの信条告白のなかで使われているものだろう。「ぼくは信ずる、われわれの道徳のどの規定も、野蛮人の社会への譲歩であると」
(40) MoE, 125
(41) MoE, 558–9
(42) I, 13
(43) I, 151
(44) I, 168
(45) C. G. Jung: Das Seelenproblem des modernen Menschen. 白水社ドイツ語テキスト、二六ページ。
(46) 追記した時期は正確にはきめられない。「アンダース」の名が追記のなかにあるから、一九二〇年以後とも推定されるが、それらが一度に追記されたかどうかは判明しない。
(47) I, 160
(48) I, 167
(49) I, 17
(50) 悪い→ニーチェの影響が濃い。MOE, 770 でのウルリッヒの信条告白のなかで、「ぼくは信ずる、人は通用している論拠によれば、あるものが善いとか美しいとか、千回もぼくに証明することができようが、そんなことはいつまでたってもこのぼくには、どうでもよいことだろうと。そして、ぼくが従う唯一の印は、そのあるものの接近が、ぼくを高めるか、それとも低めるかということだろう。ぼくがそれによって、生に見覚めるか否かにかかっている」というのがある。この「高めるか低めるか」、「生に見覚めるか否か」が、ムシルの倫理であり、これは「別の状態」と関係がある。
(51) Tagebuch Hippolyte, II, 918–923. 註の (5) 参照。
(52) 註の (26) 参照。
新版の日記の下巻の「索引」によれば、日記の上巻に「ヴァレリー」が出てくるのは十五回である。そのうち十

二のものは本稿で消化したが、残りのうちの二つは、一九〇五年のE・ケイの抜粋に、一九二〇年代に追記されたと推定されるものである。その一つは、「半ばアンダース、半ばヴァレリー」(Halb Anders, Halb Valerie) で、他の一つは「一部はアンダースがこれを憎み、一部はヴァレリー」(Teils haßt er das, teils Valerie) という、記号めいたものである。本稿で、二〇年代に「ヴァレリー」は「別の状態」に吸収されたという私の解釈によれば、この二個所はともに、「別の状態」と考えると理解しやすくなる個所だ。残る一つは、一九二〇年の記入である。「社会生活における人間の意味は、人間の業績などは外面性であるにすぎぬとみなす、彼の魂の存在にこそあらねばならないだろう」という言葉のあとに、ヴァレリー思想 (Valerie-Gedanken) とカッコのなかに入れられているものだ。「ヴァレリー思想」とは、本稿四九ページで引用した「ぼくはかつてヴァレリーにあてて書いた。日々美しい思想が完全に育ちゆくのを感ずるだけで十分だ」云々を指示している。この断章は、一九二〇年以後に書かれたと推定されている『スパイ』あるいは『救済者』の草稿 (II, 825) のなかで、同様に「ヴァレリー思想」という見出しでほぼそのまま引用され、主人公のアンダースがアガーテにこれについて話し、さらにそれを詳述するのである。そしてその話の内容は、明らかに「別の状態」内での思想あるいは倫理を示すものである。

(一橋大学教授)